

永一人のく癸未比歳署子靈其を生じたり。六秩耆乃業  
子命おの記事きじの文をえり。おむ修辭しゅうじ頗すなはみ。あまよありて  
世よ子こ抄しょうせり。享永五年六十九歳。十一月二十二日。子諱  
小終しょうれり。乃業曾て蘿山らせんと号し。又墨癩むくちと号し。あられど  
も乃業の号一時子後播ごんはと号し。

肥後義士

熊本くまもとの藩士某たんにはうる。き役やく少く勤め。志こころがれど性質せいしやう  
篤実とくじつ。少て深ふかく佛ぶつ乃子なご佛ぶつ体たい。信しんん歩ふう。海うみ軍ぐんが。ある年  
江戸えど詰つめのをうらう。返國まきこくおぐ。小持こもち仙せん社しゃ。本号ほんごう一體いつたいを。ゆま  
くく。平生へいぜいんごうけあり。子こあ。射や日ひ。信しんん。表ひょう長ちやう屋や乃  
志こころより何なんんごく。乃なご性じやう人にんと。あ。め。居ゐる。子こ古こ乃なご具ぐと。商あきふ

者の丈二尺許の殊陀の木像を携へ通るあり。いり。古こ古こ仙せん  
あ。殊勝しゆしょうの。れ。と。心こころひ。ル。れ。呼よぶ。あ。く。價あひを。定まめ。二百文。子こ購かひ  
はて。や。く。あ。く。洗あひ。佛ぶつめ。初はつ屋やの。所ところ。子こ妻あ妻あし。の。香かう花げ  
と。手て向むかけ。朝あさ夕ゆふ。此こゝ看かん經きやう。京きやう乃なごあり。か。條あり。子こ古こひひる。う。ん  
子こ乃なごか。こ。欠か換かん。た。れ。ハ。仏ぶつ工こう子こあ。つ。へ。修しゆ復ふく。し。て。杜と嚴げんと。加  
んと。柳やなぎあり。お。り。さん。と。す。ふ。い。り。が。志こころ乃なごん。過あま。ち。と。り。お。せ。  
子こ彼か仙せん像ざう。お。り。ふ。お。く。子こ其こゝろ靈れい。其こゝろを。お。ま。て。て。中ちゆうあり。古こ令れいの  
小判こばん三十支。出いる。り。か。れ。ハ。米こめ。あ。そ。て。警かり。き。つ。て。あ。ふ。小こ此こ本ほん号  
乃なご持もちま。う。る。も。知しり。で。驚おどろ。さ。る。の。あ。ん。と。も。や。く。毛け本ほん  
の。ま。子こ返かへ。さん。と。ん。子こを。さ。あ。く。扱あひ。の。商あき人にんの。舞まび。通とほる。を  
志こころより。お。子こ乃なごあ。日ひ乃なご。乃なご乃なご。或ある日ひ。途とちゆう中ちゆう。あ。り。乃なご商あき人にん乃なご

初産一く先以購一私像ハ何爰より買來一と云ふは乃て  
子商人大不發多き不中のおもくはれなきやそんも子さる發多き  
そとのよりありあり賣主小對面志一と商人子抽とる業内を  
乃て小麻布古川と云ふ地のや賣家子つれ終ぬくて果ハ門  
子つりくつる小つり小も佳一き住居子てまハ浪人ておぢ一朝  
夕の烟も終向がそれ風情あり扱事の始終をつらう子讀て  
彼金をさうぬ一交をてつらう子ま云さてく世ハ直ある  
人もあるものさか我らとてハわと西國方ある國のち小仕て譜代子  
まが諸君の為ふく浪人てあり後征て江戸子東北とあふと  
ハ清水の池とあり子子ま止ひ年月かちあ子あ々の一族も絶  
えて今ハ身のおもえまをくうらま病ま一在あふ調なハ子米

小新子代者一おて先祖より傳來の本考を賣らうあ  
てせ白と送らふらつとす後のとれまハ本考の墓並より封  
金のやまも言て先祖の海きんあふまをそれまハ生許のち子入  
一ハ天の標けと云ふのありまぢらう我種ハあも見捨られハあま  
あぢきれれ身のをてやと涙の外子朝をきく會をせま子お返一  
あが一互子讓わひ一が存子ハや声言一あり一ハ家ぢの事りて  
何ものぞと尋ぬま子あま一あを語るまあぢ感ハ涉るハ  
おぢおぢあが一考て云出西士の争法廣あまて又あぢくもあ  
がえ傳くま子各五親子隨ひぬらう一とて浪人子向て云る  
このやささるも理なきまあぢなぢとて生許の會子ありあぢ  
更親ぢハ屋上何が子持傳人の一おを金を返すゆひ一社謝とく



お生るるの先世おあし居候し甲州武田家子仕たり  
 武田家滅亡し子おあしむく武田家子候り候り父ハ薩島氏母  
 ハ赤宅氏あり候り二子あり長を祖名といひ季ハ所立隅  
 あり小向の田中氏その志苦あをを知りて女をりて立隅  
 子妻あをを遂に家嗣とす立隅の人とあり志偉おて経世痛  
 民の志あり慨然とて常子管仲の人をを致意ありて  
 川崎駿とて其志を以て人民離散し其地を治り  
 縣令とて立隅の賢あをを知りて登用ひてその地を治り  
 一むる子おあし一年がむる小駿作や、操りて人民を安し  
 三年して始りその功を以て子おあしに候りて小田  
 一區を授けり義田とて親族を養ふる鰥寡孤獨の救ふべき

の急あし子候りて其保登卯の春官子居りて農政あり  
 此事を問たあし小上言すことこれ條々其事候り切あり  
 うらハ仰とて業り荒川乃あを治むる子願その功あり  
 小ありて宿役とて引り帯刀を許さるあし内勾川を濬ふ  
 ことを司りたしを其勅あり候りてその川北東西子堤を  
 築き名づけり又命埋とて石碑を建てり其額末を  
 記り候り其事保の己あし擢らる候りて其川おあし  
 崎玉の知縣とあり候り幾やとかく才ありぬ時子其保  
 己あし十二月壬午の日あり川崎小向村子築り立隅をい  
 官子養むの日賦税を均しくし冗費を除き、淫殺を省  
 き民の抄害をあきりて多し其志を以て其志あり

むねく不虞の備をかく農時をくまらば教丹乃岡  
虚物寄るところれく孝元施すとあるとある一丘隅没  
すもよ押おひく朝野の事子そくく嘆うさるものありと  
そのうろく著るころの書民百省要二十卷あり世不  
行なると云

大島芙蓉

大島芙蓉名ハ孟彪字ハ孫皮芙蓉ハその号あり甲州吉  
架の人あり元先ハ新田の氏族あり故ありて名ちく姓  
名を易うとそと古芙蓉の号の始より更をもたれハ  
海内をめぐりゆのき一人あり敏亮くしく才ありうて  
坊城菅分子姓ひく典を習ひて朝儀の学子たたる尤

精々性書画を愛せりおよそ石室金匱此叔あるハ名  
蹟碑記の類旁く抄りゆのめ博多強記その比を足るこ  
のあり風流の人士慕ひゆするもの多しこれ学識を資  
鑑定す子利あるもの少くざれば名價海内子あまぬく  
筆劃の妙絶子ゆらハ固あり論を待たば世人まをひをひ  
て珍とせり父を志新とひくうろく徳奉氏子姓ひて医  
と業とす芙蓉医を好む弱冠ありて京師子遊び  
遂子名を成す子ゆらハ天明四年四月二十日没す時年  
六十三歳小石川年量院子葬る

美成云芙蓉くつて親印補正の摺あり実小筆劃を  
学すものく至宝ありて志強き故此一助ありとあり

増田鶴橋

増田鶴橋その先人うろく眼疾を療す乃神効方を異  
人より受け天正の末年江戸に來りて市子隠れこれヲ驚  
く子年をつくるの肆人子あこれ子世々その業とす  
り棲聚の實あつたれども日くはるるころの薬價をりて己子  
都喜家の夙小藉ていさうも乞ふをれうろく鶴橋子及  
び願學を好み名ハ助字ハ伯隣少壯して白石先生  
子師事て詩賦をりて言事と稱せり白石先生の詩名海  
内子穿ゆると教十年とどもその令あり固より經世  
済民の志あり詩名をりて家を成すとて恥と自視  
言尚ありて妾子人子假ずうろく詩賦をりて人子教るとい



こと欲せしなりその門子登るもの至る家一鶴橋獨詩  
を以て白石先生子愛せりうろく白石先生志づく  
その家子往くとわりうろく貯藥橋不鶴を畫るるを人々  
鶴橋と題せしむ遂にまこと自号とせり鶴橋常子賓客  
をたづね内席小絶るるをかく畫扱するものお屏うろく  
の先子至るものあるひは此子行くとせりいれども去ること  
をゆせしめず浮ある者難然うろく日夕毎に客常子満  
ち主人その中子起坐し行然うて歡びありてはれども倦二  
とかりたれし熟碎すれはるの席子存りて假寐す少  
ありて寝北ハ復人を呼く酒を命す迎つて送す必  
しも賓客の容を為す持りて是よりお定るるをりて

適意とす客も名その真率を悦ぶるにむすもの日か客子  
帰る如きおりの鶴橋が家人のとり習ひて常とせり  
浴衣とせども厨膳うめは辨ずあるは財として客の来  
らざることをあれは僮僕ら主翁の樂ざるを憂ひて平生  
交遊する友れ家子より使と稱して招き来りその人未  
らざる財ハ又宅子適く男お識る者とせども招き来り  
て難賓悪客とせども必これと邀ふ僮者おねがふ  
主翁のお識子遇とのあれは昔は誇ひく鶴橋子より  
り主翁をよそ暮しむ晩年これが為子稍貧しくは鶴  
橋宅の好くおく戸室破壊すれこれと修すもかきすふ  
はか一舟船あるのみ出行せんとせりハ即出温袍つるとも

いさうも取る色ありされども諸客子饗する飲食乃費  
子ありてハ家人目ふゆるとろれ價をりてとくやこれと  
供しとて思しむあるも他を回すうて十年ある一日  
の如くして衰すところ鶴橋詩名をりてゆえり然れ  
ども暇自樂めるのこもとより文学を好めどもあつと  
信士とせどもせり又書業翁あれども書をうるとのこ  
をむねとして貨殖をとりせんやゆくも文雅をりて禮行  
をうらり飲食をりて人の羨り慕ふとせよるこせんやま  
あやふらふ名を逃るも亦碑一諸君これよりて飲酒の  
友とせりふてあるあれは性貨節を好む候ありてま  
あり貴客あり詩文をありとありとせり才子不

談話の次より白石先生を推戴きてこれを飾りて云匹  
 夫がうらゝ酒巷子居るといふも幸子公字長老の智を授け  
 て喜歡を辱するといはれ豈あやう一日もこれを致すと  
 あらんや抑あの子も白石先生の餘思ふある事とあり  
 とて涙を流しやうまゝ酒宴の用といふも談白石先生子及  
 び必涙を流すめ嗚咽多しとて好やう初白石先生世子在  
 しくとき毎年八月十五夜子鶴橋子會集せり白石没後そ  
 の時北風ふと小を隣子て貴月の歡あるを少く子堪ん因て  
 私子その日を以て終身の心表と見日子八宅子出るとあり  
 まゝ客を拒す倅然て牙戸妻食しく夕子いふ事とあり此  
 情めるとうくの如く時しく小心ある平生の活達子似ざる

を人あやうううう鶴橋詩をりく南郭の門人子支けり  
 南郭の雷名郡下子あやねきををりてある村里門人子謂て  
 といふと白石先生子恩歡をうらむとあり又通謁く他の  
 一先生子見んと心まると不安せざるありといふ子よりそを此  
 人南郭の事を知るを待て鶴橋を迎へたれども鶴橋がへんせず  
 といふ云既に小秋慕つる先生あり從適意子落くしておひ  
 ても念まると不安せざるありとて果ざるをそのつ人南郭小笑  
 語しつゝこの後南郭もうねてその名を少くといひその人  
 とあり也能あるとをまうといひある村鶴橋へ訪きて歡を  
 盡しくゆれりとてこれより志むく初うひくその奇人たる  
 うねて少くといふの如きを知らうと云ある年の六月小疾



ありやめると日あがりて没せり

河保壽

河保壽氏名河原三郎中甚と号せり江戸麹所乃屋敷  
里世郷里子任り人となり易と教信あり素より書を  
好めども苟も名を成すことを欲せらざるその師を  
就て學ぶるる鳥石の門子なり書を學びその業を  
今と己子年ありまゝ服南郭小親矣せりひらく一時の名  
流と交遊つり中年居住れ地を信谷子買ひあはるる地  
溪子のそと丘子より松筠齋茂て屋を遠く端響耳を洗  
ひ絶塵清勝愛すべし南郭つみ子あり想ひ玉宿おは  
む詩を賦し酒を酌し暮のうらさをもおぼえす(一)

浮地家子寓居して静巢の二字を扁額と爲りてその門  
生往來の乃河迂曲あり小困すも志むくおれ己と爲  
す麹町子儒居たり弟子授りありこれハ進むとせんく  
多く上ハ侯公あり士庶福侶といへるまで臨地の業子  
ろぞあはるる集あもの多し殆都下の紙を賣るる  
しむ天明癸卯九月癘子即すと傳子五百竟子起す十  
一日享年七十ありて没す

吉田雨岡

吉田雨岡名ハ批樹字ハ甲夫通称忠藏齋崎と号せり江  
戸の人その人とあり吹敏吏務子精練して其功勲多し  
明和の末年涉州花川戸のりり子搦を造るの議あり

議者之々々水底に巨石ありて橋柱を揺る子ありて  
うらハ空しく費の多うんのこととひて遂に果さるる  
て安永のまゝの西長善海老の若子水底を掘りしめて柱  
と柱との孔法を造りて建議し橋を造りて往來の便  
商人と日二夜を程とすこれハ海老修造の用費尤鉅と  
とをいさうも公幣をつひたをさく公私の便利を  
ほりてせうにその功ありていづれも名づけり大川橋  
より天明丙午に歲周來洪水の時河木怒漲大川橋を壞損  
すより翌年とす事急あり西長以夙を以て意を決して橋  
の中風水勢の最衝突する所の教大を断りこれハありて  
橋の壞損せざることをゆるり人々もこれ敏捷機警を嘆美

せんとしをこれその他此處を大むねくの如くその明  
年都下大穴これ子加ありて是歲子て米價翔躍世間  
やうありて人心を安んせし西長賑濟の方を議その切  
大ありて井純卿子學ひ津元堂と交りやうありて橋  
子藩平春海を交りて如きをこのとき秀逸少くは技  
仕の浮落髪襟服一地を東叡山陰ある時雨岡子ト  
うつろり西長乃人々号せり居を水竹の圃に結び松と  
梅とを植りてその木の下に吟咏し志を言ふす又  
遠行の癖あり四方に遊遊し山川名勝の奇景をあま  
ぬく無愧して足跡天下の半にせりその紀行十有  
餘卷題し船遊餘録といふ享和二年十月九日没す附